Try・Angle ―三人の演出家の視点― Vol.3

2014.2 ～ 3

新訳上演
New Translation

アルトナの幽閉者

Les Séquestrés d'Altona

小劇場

●前売開始：2013年12月14日（土）
●料金　A：5,250円 B：3,150円

作：　ジャン＝ポール・サルトル
翻訳：岩切正一郎
演出：上村聡史
出演：岡本健一　美波　横田栄司　辻 萬長　ほか

企画意図

「Try・Angle ―三人の演出家の視点―」シリーズの第三弾は、文学座の上村聡史が、岩切正一郎の新たな翻訳によるサルトルの『アルトナの幽閉者』に挑みます。

1959年に発表された本作は、同年、パリにおいて初演。サルトルの創作劇としては最後の作品であり、『出口なし』『悪魔と神』と共にサルトルの三大劇の中に数えることができます。この作品は、当時のアルジェリア戦争でフランス軍などがアルジェリア人に対して行った拷問を問題化するために書かれており、舞台を第二次世界大戦に置き換えています。第二次世界大戦に従軍し、その戦争中の出来事により、心に深い傷を負い、終戦後、13年間も自宅に引きこもったままの生活を続ける主人公のフランツ。彼を軸に、サルトルは「戦争」と「責任」というテーマのみならず、出口の見えない状況に「幽閉」された人々の閉塞感と絶望を描いています。

作 品

1959年のドイツ、造船業を営む社長（父親）宅で、咽頭癌に侵され余命6ヶ月の命と宣告された社長（父親）は、後継者を決めるために家族会議を開く。次男で弁護士のヴェルナーとその妻のヨハンナ、長女のレニが参加、父親はヴェルナーに会社を継がせ、この家に住まわせようとするが、妻のヨハンナが反発する。一同の心に重くのしかかっているのは、長男のフランツの存在であった。

彼は13年前に死んだことになっているはずであったが、実は2階に幽閉されているのであった。フランツは第二次世界大戦中、部下の捕虜に対する拷問を制止出来なかったことから、心に深い傷を負い、それ以来、妹のレニの世話のもと、ずっと2階に引きこもったまま狂気の生活を送っていた。フランツを愛する父親の最後の望みは、長男への対面と次男夫婦による世話であった。ヨハンナの説得により、13年ぶりに待望の対面を果たした父親とフランツ。はたして一家の辿る運命は……。

翻訳家からのメッセージ

岩切正一郎

『アルトナの幽閉者』（1959年）は、アルジェリア戦争でフランス軍が行っていた拷問の問題を、第二次大戦の敗戦国ドイツでの物語に置き換えて扱っている作品だ。同じ敗戦国として、破壊、拷問、虐殺、戦争裁判、経済復興といった問題は、もし50年前にこの戯曲が日本で上演されたら、今よりももっと歴史的な切実さをもって観客に迫ったことだろう。

今、『アルトナ』は、そうした過去の記憶と重なりながら、また、3.11以降はふたたび廃墟、復興、「神話」崩壊のテーマを際立たせながら、50年前にはあまり切実とは見えなかったはずの一面をわれわれに突きつける。それは、生きる意味の喪失にすくみあがり苦しむ社会、ますます見えないものとなった〈他者〉によって一人ひとりが監禁されているように感じられる社会、自分のなかに巣食っている〈他者〉の欲望とイメージにみずからを合わせることで自己を疎外し、あるいはそれに疲弊して人が引きこもっている社会で暮らすわれわれに、みずからを切開するメスと病巣を見る鏡を手渡すように、迫ってくるのである。

『アルトナ』の人々は、われわれ誰もが狂っているように、狂っている。そして都合のいい真実だけを自分のものとして引き受け、欺瞞の幻想をつむぎながら、生きている。

風の吹いている、みんなが嘘をつき合っている町、それがヨハンナの幸福のイメージだ。われわれのなかに、これを偽善の名で平然と突っぱねることのできる者がいるだろうか？　だがまた、ためらわずそれに同意することのできる者もいるだろうか？　われわれにはどんな許しと和解が可能なのだろうか？

手強い芝居だ。だが劇場はサルトルを講じる哲学教室ではない。俳優が生身の人間としてもがき合う家族の対話へ、沈黙と叫びとさぐり合う言葉がぶつかりあう生の場へ、訳の言葉を造っていければと思う。

演出家からのメッセージ

上村聡史

サルトル作品の中でも後期にあたる本作品は、フランスがナチスに虐げられた経験を顧みずアルジェリア戦争の際に行った拷問からサルトル自身が感じた“無条件の暴力”に対する考察が反映された作品です。敗戦後の復興を遂げていく西ドイツを舞台に設え、戦争体験の苦痛から、自らを幽閉した主人公フランツとその家族の葛藤が壮絶に描かれていきます。

現代日本を生きる私たちは2011年の痛烈な体験から資本社会における人間関係・他者の在り方を見直すことになりましたが、同時に戦後の日本人の在り方を問うことにもなりました。現代を生きる私たちが過去を今と切り離すのではなく、むしろ過去が自分自身の一部であるかのように捉えていく意識を持つ必要性を感じながら、一方で50年ほど前に書かれた『アルトナの幽閉者』では劇中フランツが三十世紀を生きる人間に向けて、自分の想いをテープへと吹き込んでいくシーンがあります。それは、あたかも輪廻していくであろう人類の営みの中で、自身の経験した悲惨な過去を血肉化しDNAとして残そうとする人間元来の姿のようでもあり、そのテープが再生される瞬間は、痛烈な過去が生み出した叫びがこれからの未来に刻まれていくようにも感じます。

観念的な理論で構成されたサルトルの世界観を、大きな人類の営みをも感じる神話的な広がりのある作品に仕立て、魂の叫びから生じる“生”の質感を劇空間へと表出できればと思います。

スタッフプロフィール

アルトナの幽閉者

ジャン=ポール・サルトル

Jean-Paul Sartre

フランスの哲学者、小説家、劇作家、評論家。1905年パリ生まれ。“実存主義”を世に広め、世界中の若者に大きな影響を与えた、第二次大戦後の世界の代表的知識人である。小説『嘔吐』(38年)、論文『存在と無』(43年)で名声を博した。43年の『蠅』の上演により劇作家としてもその名を馳せたサルトルは、44年に『出口なし』、『墓場なき死者』『恭しき娼婦』(46年)、『汚れた手』(48年)、『悪魔と神』(51年)、『キーン』(53年)、『ネクラソフ』(55年)と矢継ぎ早に戯曲を発表した。59年に発表された『アルトナの幽閉者』は創作劇としては最後のものである。

岩切正一郎

Iwakiri Shoichiro

1959年、宮崎県生まれ。フランス文学者。国際基督教大学教授。戯曲の翻訳に『ひばり』(ジャン・アヌイ)、『カリギュラ』(アルベール・カミュ)など。著書に『さなぎとイマーゴ: ボードレールの詩学』、翻訳書に『ノアノア』(ポール・ゴーギャン)、『世界文学空間 文学資本と文学革命』(パスカル・カザノヴァ)など。2008年、『ひばり』と『カリギュラ』の翻訳によって、優れた戯曲翻訳に贈られる湯浅芳子賞を受賞。新国立劇場では11年『ゴドーを待ちながら』(演出・森新太郎)の翻訳を手掛けている。

上村聡史

Kamimura Satoshi

1979年、東京生まれ。2001年文学座付属演劇研究所41期生として入所。06年座員に昇格。文学座の公演に演出部として参加しながら、木村光一、鵜山仁の演出助手を経て、05年アトリエの会『焼けた花園』にて初演出。また翌年06年アトリエの会で上演された『Awake and Sing!』が好評を博し、優れた舞台芸術の再演と放送を企画するNHKシアターコレクション08にて再演される。09年より文化庁新進芸術家海外留学制度により1年間イギリスに留学。主な演出作品に『ミセス・サヴェッジ』『棒になった男』『連結の子』『ポルノグラフィ』『千に砕け散る空の星』、オペラ『人間の声』など。